

監觴無底抄

自  
正  
一

特別  
~ 12  
1077  
15





利  
1.077  
H/15



溲漂

才七歳

和十月より才八才十一月

まきの事んんん

十月奉為故院行仰八講事

御門与尚侍仰物語事

才八歳

二月任内大臣

二月春宮御元服事

行年十二

同才余日春宮受禪事

冷泉院是也

兼香殿御腹御子立坊事

同時源氏大納言任内大臣事

致仕左大臣為按察太政大臣事

歳六十二

宰相中將任權中納言事

權中納言四君殿女君の入内事

歳十二

二條院東院造作事

花教里外とと後せんとおひす

三月十六日明石上座事

女子

宿曜師勅申源氏御子可有三人中事

中代をとり太政大臣めて位をさしお給

事しつふの夕暮太政大臣の事行川事

と左大臣に任じりういんこれとそ

後の昇進といふ十四位ありしは

ありしより始終の事紙より

なり

宮内卿宰相女為赤石姫君に乳付下向事

少將君乞之

源氏君物語明石上事 紫君恐賜事

五月五日明石姬君五十日事

五月雨比渡花教里方始事

源氏君如元以淑系舍為山曹子事

入道宮准太上天皇事 中封院目未了

八月權中納言女入内事

弘徽殿女御乞也

源氏任右詣事

此内明石上同詣任右遙奉見源氏事

元近將監任延尉事

賜童隨身十人事

若君跨馬供奉事

夕務之

難波御鞍事

惟光以源氏君身紙奇造明石上事

奇宮卿系六条卿息所因病為危事

源氏詣六条卿息所給事

遣書於系奇宮事

七八日以後御息所卒去事 可六より人  
 奉御文お前母宮事  
 院御方念六条前所宮治事  
 源氏系入道宮中前東宮入内事給事

冷漂

或漂標 以歌為卷若

以奇為其名源氏若女七歳の十月より  
 廿八歳乃八月申々の事あり女七歳ハ  
 明石巻の末同年也

みとゆくーふかきりーよあまを  
 りくりあひわふえりーいぬーれ

此を乃若び奇みしてつとるり  
 私劫 十尺 流湍 シモキリニヤミ 投瀾 フシ 砦沓 ハラス 朝軋 文選才四南  
都賦瀨水行

出也 但立切



河

相繼乃帝也湯事之院也今々々々  
議あふれ上古雖無即位之儀追号  
不可勝計中古寛仁小一条院か  
と如然漢書太公と太上天皇と号  
と云はれし仰古曰天子之父号曰皇  
不豫治國不言帝也

帝を御門と訓せり号ありや  
ぬとて國を治せし帝位なり  
然るやといふは

是ハ帝位なりは美ら  
たりとすなり帝の字と  
ゆえ朱雀院と山のみ  
泉院も同

と云はれ者別乃義也

源氏を故院此御号と  
明石の事なり

寛平御記 寛平元年九月甲辰依  
御夢有所行御八誨也事先帝遷



化ノ後諸公子勦力アハセリ當果行也即任意  
遊獵不勅此事可謂不忠不孝之甚  
者也之先皇成多ク人知て御  
八講とて之を御事ハ御事ハ御事ハ  
不とお似たりは先帝を仁和の令  
とと也

寛平元年九月、故院老存と多り  
人知て御八講とて之を御事ハ  
花鳥此物何事と也此例あり

事と思ひて多かり也

いそかの志門とゆはんはハかろめ

あゝハ乃巻云其れは位りあり  
あやまけり取外りしハを此例  
あゝあり其れは其の法ハなり  
かといは後外ハなり

故院 相壘 乃源氏此御事ハなり  
ぬ初也

私相壘とて延喜ハ比と承之延喜此



沙門の如く深なる能くしひのやとそ  
も多し深氏と名名のあはくそとそ  
みよの能くは遠くそとそとそとそ  
くいあつとそとそとそとそとそ  
乃事とそとそとそとそとそとそ  
るりとそとそとそとそとそ  
所めとそとそとそとそとそとそ  
か〜〜〜

主と仰目乃能くそとそとそとそ  
大〜世とそとそとそとそとそ  
そ〜おほとそとそとそとそ

世れ中か〜とそとそとそとそ  
主と乃深く深ん所とそとそとそ  
おとそとそとそとそとそ

あ〜とそとそとそとそ  
深氏乃君の母多能くそとそとそ  
事とそとそとそとそとそとそ  
多よとそとそとそとそとそとそ

并

一とよみあをいひしとくあしや  
私はいのちうとつり刺さうかわりむも  
あもともるしむ或は海軍之受志実  
うまし一とくうわんといふしる  
わらわかん力所はし

朱産の位派系又冷泉しむつり  
ぬらんし

かりあし

勝月新也

おとくはあひ大宮とむのしむをかく  
のそあはいしんか

并

皇太后又ぬし一朱産よ大宮と  
勝月新也あしぬし朱産のそしん  
あしん勝の父大宮と太后いあしん  
しん子これと出畑之又朱産と位と  
ぬしん力ゆんあしんしん勝のそし  
あしんあしんしんあしんしんあしん  
あしんしんあしんしんあしん

かろうちん此の由りて

け種をそへ時よあつて勝てると必すあま

川人きんせよつねえち成あくれり

そんち成東産の是より作也

人よりいひか

朱産の印刻勝此深氏よりと朱産の

思ひかきまつりて也

ははる此のよりの

朱産の印刻勝此深氏よりと朱産の

母よりいひか

これは深氏よりして作らる

とらあつたふりていともかたんとと

さう也

勝のりより深氏よりいふれは今がとの

しよよといひあつて朱産の印刻

は深氏勝成の事よりいふ也

あつて朱産の印刻よりいふ也

とよりといひか又深氏印刻は

むらあひのそあまは

女君ふいやはく

勝のさゆは源り事代治りおくら

むるんともい

ら〜あ〜とゆゆをらゆ

朱雀の西の

か〜ら〜く〜とよ

又朱雀の西のむらあひのそあまは

事代治り〜とれ〜の勝の版り

西子つ〜とん〜と〜の凡人あまは

〜人作〜

ゆ〜ら〜と〜と〜

勝の之

ゆ〜ら〜か〜と〜と〜

朱雀のさゆは源り事代治り

ゆ〜ら〜と〜と〜と〜

ゆ〜ら〜と〜

是ハ朱雀院の西のさゆは源り

ゆ〜ら〜と〜と〜の勝の版り

源氏君よりと書さよふいふふらふと  
解りくふいふと書さよ

かゝるものふらふと書さよ

朱崔院の我ん此の事なりとて  
いふと名はよふと書さよ  
と書さよ

私に此の事なりと書さよ  
人といふと書さよ  
ふと書さよ

勝と源の事なりと書さよ  
志の事なりと書さよ  
の事なりと書さよ  
きよの事なりと書さよ  
さりの事なりと書さよ  
ふらふの事なりと書さよ  
ふらふの事なりと書さよ  
作らふの事なりと書さよ  
勝の事なりと書さよ

圖書句讀如此

いとうまきゆめたり

勝のまれとみはうく思ひしる

あゝ心とくはまはるまより

源氏政宗の次の年へ 源氏ハヤク

喜宮御をんしくは事あり

<sup>昇</sup>冷泉院の四事

春宮元服例

くくまのつみしうかひしうき

為雲女後之冷泉 <sup>まゝ</sup>の源氏あり似

源氏事候おのゝあまのひかひそと

うらあはとせそとめし

至上 <sup>集</sup>春宮 <sup>冷</sup>とうつらうき

て國を治まの事候おのゝあま

をあら

杉形 月の女日ありゆくにゆつり

御元服の後同二月廿余日御讓國也

私  
大後云  
田融院  
冷泉院



安和二年己八月  
十二日即即位又  
是十一歲即位ハ  
思日准スル秋

私延在乃みしと此即位ハ朱薙兼平のつ  
こは終てそ終材と天曆此ハ兼平此みしあ  
此才あて即位とつさまつりい冷し朱薙  
の才しそつさ終つる事相壹と延  
茲よ此しつらよしくお付つふとのこ

或此後よハ國ゆつりハ踐祚トしハ是帝  
崩御し終いし失位とほこまよと云先  
帝位とつり終ひて位取ゆつりまふ位ハ  
讓位とつし西子あすとも兄才よ即位ハ  
ゆつりまよハ同く讓位也

おりき此此おれりあつてさり  
此此ゆつりくと太極ハ驛因章し終つて  
しおろささ滿ありともんれとつた

朱薙乃大臣ハ作つてさ極之位とさる  
終てハいあ終りあつらあつてさる  
まら滿取の如ひて名とあつてさ終書同也

しよキヤツテシ  
むろい兼香殿のみこ  
シヨ  
兼香殿



宇藤原良継魚名未任之初次左右大臣下令  
外官也左右大臣關あるに限りて内大臣は  
如斯く之教うさまりては内大臣は令  
外の官あること

私凡三云ハ太政大臣左右大臣此三人こそ  
上は内大臣は任さるる事と云ふは  
之又令外の官と令とのせらるる官也  
大織冠の内大臣は如斯く令と撰さる  
しりといふ事なれども後任せらるる人  
かくて中絶去りての令とのせらるる  
皇の御宇も又任さるるは答り後代の  
屋うそ世中此の御りこと

源氏君系機と執事人如く

繁務職人 私 執政の恙ありは  
て養上の又大臣と抄政をせしめけり

致仕大臣執政東三條園白例

致仕大臣

攝政

花

天皇御元服の後も甲子の幼主此の時攝政  
とありて君よ政く人となりて後ハ攝政  
とありて君よ政く人となりて後ハ攝政

國史後辟ハキニニヤハスト訓ト云

ありてとありて國白と稱する冷泉院上り元服  
後受禪の時攝政の例清和天皇貞觀六年  
元服あり同年九月忠仁公良房攝政の

攝政の詔とありて例ハ准とあり也六十三乃  
年齢外と忠仁の例ハ及ふハ云事事

昇

一勅忠仁公良房攝政例ハ六十三乃

外ハ云事事也

何

攝政異朝唐堯時奉舜為攝政殷湯以伊  
尹為河衡周成王幼而即位傅陸侯霍光奉武  
帝遺詔攝政如周公故事然乃以周公且  
霍光為監觴也 國白者漢宣帝 立霍

光猶執政非幼主之故霍光還政宣帝猶  
令開白乃機開白号自此而始也

本朝仲哀天皇崩後皇太后攝政三韓而歸  
筑紫誕生皇子<sub>之</sub>在襁褓皇后猶攝政  
遂臨天下六十余年<sub>也</sub>同帝奉称攝政其  
後履中天皇二年平群竹宿称為攝政推古  
天皇朝皇太子厩户<sub>帝姓也</sub>攝政<sub>命</sub>明御宇  
皇太子中太子大兄皇子又攝政清和天皇  
幼而即位外舅太政大臣從一位藤原朝臣

良房 忠仁云 奉文德遺詔而攝政貞觀八年

八月十九日始蒙攝政宣言 去天安二年十月七日始行内外庶事清和帝

即位 是以人臣為攝政之初也今降彼二門為執

政之臣開白者陽成天皇元慶四年十月八日

詔右大臣正二位左原朝臣基經 昭宣云 始

為開白 元攝政 是亦開白之元始也又景行天皇五

十二年八月以武内宿祢為棟梁臣 之攝政号

履中天皇二年始置執事四人 執政類云 答言曰

天皇代平群木兔宿祢為攝政

やまひよりりてくくぬとく人  
是より致仕大臣辞退の初  
うきひまや終つて

致仕乃大臣此取引たる  
人乃くにしつり世中此はまうわあり

私せ乃うまゆり時臨看  
はくもくは又是より吳國の例を  
引て括政あま事とまあま

礼  
漢高祖戚夫人と罷り趙王如意と太子

白てふんと申一時呂太后おまけり  
て張良よらりて張されよ父子は  
の事あれいんとせき事人位高山  
四皓とて四人の臣士あり高祖せも  
考く是と太子れ多とけよせられん  
りやまひあまらまやわん張良  
うひりよ向て四皓くりて是と  
て高祖の前よ朝し高祖大は  
羽翼とてよ如と如して惠帝と

太子にしてふれりし事何ぞ之

河 漢高欲易太子呂公怒同留侯計曰願上不

能散者天下有四人者年老矣為書使

辯士固請直來於是呂后奉太子書迎此四

人至高祖置酒太子侍四人從太子年皆

八十有余鬚眉皓白衣冠甚偉上恠問曰彼為

者四人對各言名姓曰東園公角里先生綺里

季夏黃公上乃驚曰羽翼已成難勸史記

凡此外漢家其例多也

以ふるむしとありまれし

致仕の人乃又指政する例

太政大臣トクナリノミ

河天智天皇十年正月當伏見皇子以大友始為

太政大臣寶字元年改乾政官為太政官

忠仁云貞觀八年八月十九日始蒙稱改詔

六十三 此例也

私太政官當官統八省及諸國天下事悉

受此官也故云都省本名乾政官

太政大臣師範一人儀形四海无其人則闕

之設云則闕之官有從之撰故非其人

者常不任之又无職常之官也



世中十三年

致仕大臣も病をこころにうつさるひしつと  
と大いこの先朝乃時大臣をよめんれり  
かろせりしなり新者一は

よりと致仕宰相中將権中納言よりなり

は宰相中納言の後より致仕相國と云れは

二条乃相國のひとめて先朝を時よ  
人なりとと只今の権政より  
と此方よりと心をもつむこの教を  
了きはとて先朝の所代より志  
人なりと云く

權中納言持統天皇六年始置此官其後  
罷く大室二年定官位今日元此官の令外但  
慶雲四年又置之と相當從三位也

かの日の君り

二条相國乃女曰君之太右のいもうと七勝  
しりいあゆ

十二よりありま

は春よ冷泉院 而今へありはのて弘徽  
女御といふ

かのよりあり

柳乃春よあり紅梅右大臣乃事

紅梅此おとて柳乃と罪をまゝ一と此

幸といふありて知へ

紅これも曰君れ

くくくくくくく

指中細をた子

まろく近の君

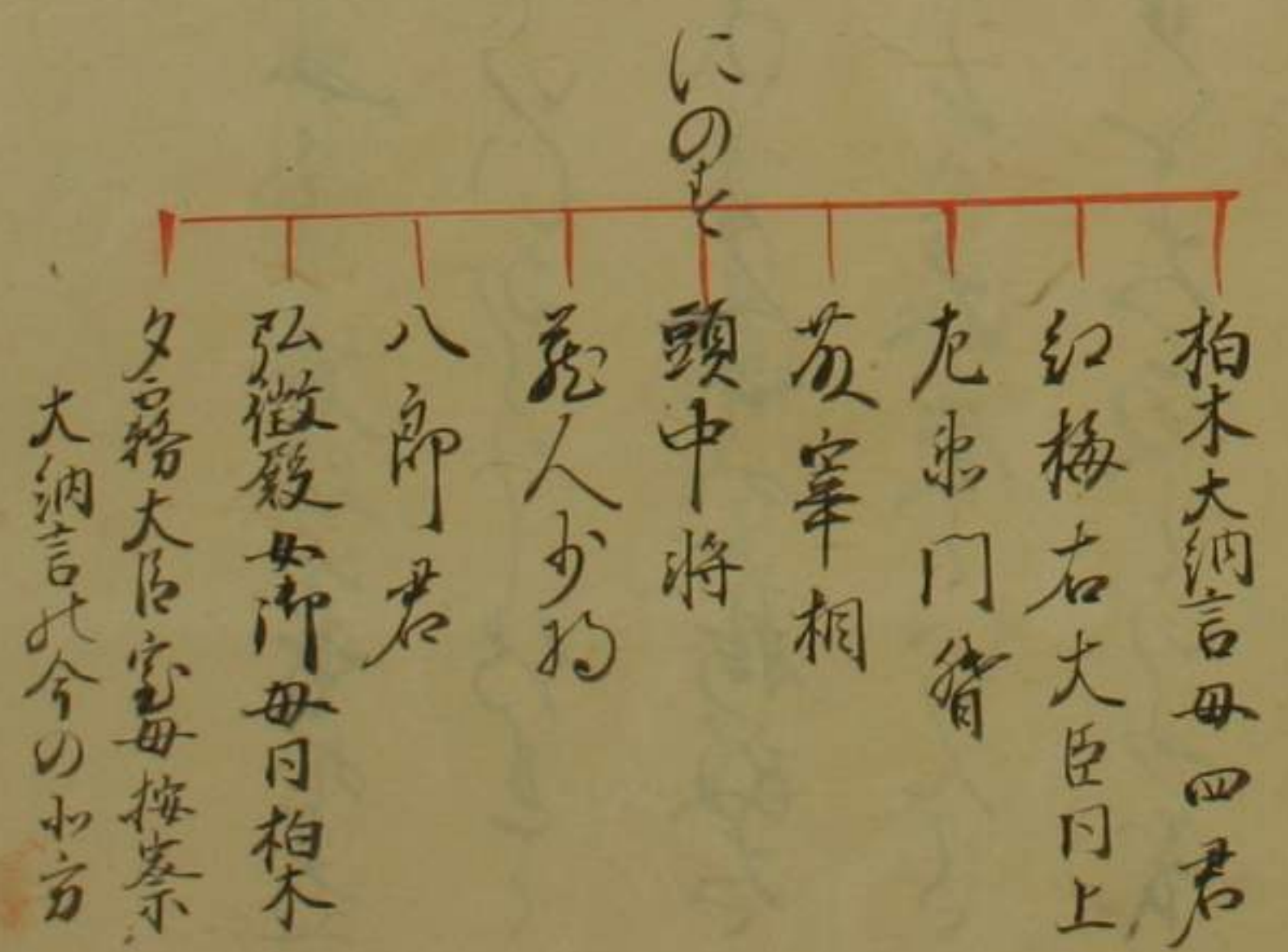
為のいそく

これとのせん

大殿

源氏のよりきみ

當時指園乃父為前官蒙内覧宣旨時称大



柏木大綱言母四君

紅梅右大臣同上

左中門督

左宰相

藤人少将

八郎君

弘徽殿女御母曰柏木

夕暮大臣室母梅茶

大綱言れ今の如方

及今大政大臣其才格政子は権中御之号  
大返し糸不富能るこれい母おかひの  
同いよしる

大政大臣と大返しといふは君は夕暮れ  
中此より大返しといふは  
昔いふはと申す事く格政大  
政大臣世人とりて大返しといふ  
うまよりいふは大臣と大返しといふ  
いふはあつた

大返しと大返しといふは  
大返しといふは  
一劫の事と通す

私に昇義あり 花の義能くあり

うら喜宮の殿上

夕暮れ童はて内春宮は昇ぬとあり

こむめ君はうきあり

うら喜宮の殿上  
夕暮れ童はて内春宮は昇ぬとあり  
こむめ君はうきあり

まへへ

あゝあゝておれ

養育此母又父おと此今又思ひ方をも  
まほくのまほれ方時くそかくるるは  
このおつる事あり今かく源乃ゆ系し  
おつる所へえまおたり又う解り来し

このおつるの由なり

い度も源乃指ぬくとおつるはゆゆ  
むしにゆゆくくく

源乃今も細く指ぬのこくおつる

ゆゆみのゆゆは

夕暮乃乳母達

ゆゆ人も

あれハ養育はゆゆ

ゆゆ人も

ゆゆにゆゆつるゆゆ

ヨシヤ 日本虎 資便

ゆゆは志すゆゆゆゆゆゆゆゆ  
みゆゆゆゆゆ

二条院よりと行ぬ

紫上乃るは源氏かつひうよ女房也  
とてと後此西つらひの此世也西へ  
とてと行ぬとされ申せらるぬと御受あ  
くさくはまも

中御中はつらひの人

いとまを源乃ありいんま

かりありま

源乃の事には思ひありさかたなり

二条院の御ん

<sup>琴</sup>ひんくは院と号し

<sup>何</sup>昔乃東院の七条右満子にちよより  
て号東院れ

西宮乃在也と朱雀院の御あり時  
人西宮へかといはゆまらりやうて  
稱号と加し

院乃西宮

院の御延ふは平の院の桐葉帝より

はるのまゝ

花教里かゝるの

源乃おのい人まゝのむらりおん

んくろーまゝあつらふ事

明石上懐妊のり

お母やまゝ

<sup>辨</sup> 忘れり子とともおまつりお事おた

おろしあふん

源乃おのむらりお事おた

きお困おつりお下あつらふ事

<sup>マヨヒ</sup> 三月はのむらりのか

<sup>心</sup> 去年六月ははるの懐妊のり

りありは三月十月はあつら

十六日よかん女め

<sup>辨</sup> 前初一日はと書つら

ろーまゝ

女しておん

<sup>河</sup> 明石中宮 光源氏 <sup>于時</sup> 母明石入道女

贈皇太子宮友原胤子内大臣高友女  
母交野大領弥益女擬此奉乳

ましくえうに此こ三人みし名をひてうは  
まはへー中あとりは太政大臣くくを  
さりしーとかん人の中あはしよ中あはしり  
あはしよ女あそとあはしりーとほしり  
あーとああはり

花

宿曜は源氏此の子三人まは満長しとやハ  
夕音左大臣冷泉院の石中宮是之石  
みし冷泉院と明石中宮とや中あは  
とりは夕音此のあはしり人しほし  
くみし名あはしり中あとりはあは  
但夕音は竹川は左大臣とみしりは後の  
昇進は五十回指此中よあはしりは夕  
音大臣の薨逝の事し物故はあはしり  
つゆは太政大臣とあはしりあはしり

るより物終るはくうさ波面白くうき  
るより又申れとより大腹よ女ハワて物  
しあやと云ハ別め名よとより業よ業と  
るにたれあれハ揚るもれ女たつたより  
てとよりれくくくハツるあて 年月

私此事義紫れ巻よ故壺女所源此巻通  
るより懐妊乃州の事とよりよ申お君と  
おとらくくくさ内くあか多と女終て  
ありやう抱胎りてとる世終くいとひあう

おけしとまわらうのくはあくせうを  
中よあひあありてつしとせまうくさ  
事終ん侍りしつよ

は初の下よ義乃多よくくひのりふとあ  
くくの巻よみくよりとほくねりひま  
むま信く但前此君業の義れ兆ハ源氏一世も  
い西子れ較りりの事よあははるめ木  
そ中よい太子れりともわつて又は業れ  
初めとあまうさうゆうせんともありのる業



人北相一平の事と相違なきよある宿  
曜師よころ人へに又此身と阿ん  
せふ内よとくよりとるべきと心せ  
若葉よ宿曜師の勅ふより

せりまろりへた

源氏論の抄のいふ事とちまう  
くそくしてまをきりて源氏命の太上天皇乃高弟中を治給されは前よりみ  
おんれくわらつともあひあつり

ふむむのく

當代の冷泉く是より又相人たのゆえ  
作事とともれまうくあひあつり  
是は是也

ふむむのく

源北位よはくへ事事とあひあつり

ふむむのく

故院相の源氏をくしては親をあらうり  
とと位よりつまんとは是よりあつり



の石と又姫君殿とをうて東入じりんせ  
おかしき事

はるか前あてくらく

めいこの浦くそ然めれとあまもあじしと  
そくーやあし

故院よはるかひーせんー乃びと女宮内卿  
の宰相りしてたくらりりー人乃子か  
つー成

明石姫君乃西らつて宰相君乃事也

母の宣告の病とつひー人父の宮内卿  
相く宣告此名つま折園家よありむ  
ーの院おしといひ考ぬー<sup>ミツシ</sup>の敢言者  
おしつゝ名和奇集乃中よあり  
むよあり

くらかよ氣さばあて子うとてうた

此初あはれくはるか種ひひやう  
はるか業きほりのあひちたれ

明石乃名のと申とそくも也是しり末後か

とあもぬまのまよふまよふとてんまよふまよふ  
まよふまよふ

宰相の君乃神く

何れもや

ありしを板一き

任後物語

私草亭

遊仙窟

思ひぬとん

とやとやと思あはれもよとらぬ也

あはれわそよみ

源氏君此宰相お志の何れもよとらぬ也

物まら

明るらとすめのと此あはれとらぬ也

姫君と切り

あはれまらとらぬ

とやとやとらぬ

とらぬとらぬ

いかに

源のくくたりに南一ありにりきても  
傾杯りりり

あやういなりあは

私乳母かとおこのまよいつあはれさせ  
源乃月こそ

いしとおひぬも後升

我とう侍接わにけおひいあはれ  
てさわかちりともあひいけい  
さほりのまひあす

福んど終り

今うへに堪忠一終り

うる乃るやはる

内裏少くと時々あはる

家乃と南もつひ

宰相あて宮内りけり又此家あへ

さうへーはるまらち

あさけの初るり

い人、源れあはれとの終り乳母

おのりはるいふか  
まじりたあ

宰相君れらへ同  
まじりやとまじりかへ同

源  
福てりるさそぬ中  
はたきま物あうちまか

心をいへん

也宰相君  
うらつまれわれと行  
うらりまじりやいふ

志こひやとまじりと深  
て御さるたわれら  
まじりつとまじりつと  
まじりつとまじりつと  
まじりつとまじりつと  
まじりつとまじりつと

おのりはるいふか

まじりつとまじりつと

おのりはるいふか

車あてて

めれとのくらふ時めさぬはりて

ゆくりゆくりす物

河

皇女禎子

三条院皇女陽明門院是人  
山母中宮妍子所堂園白女

長味二年七月

十六日降誕即日被奉御鈕是其例也

ゆくりゆくり

宰相君

不き終すてふいゆくりゆくり  
事かなくこぬるよとあひまはる  
入るのおひいゆくり

入道北院是のさぬとさるやうて涼の

ほろろゆくりゆくり

又よりゆくりゆくり

ゆくりゆくり

いまゆくりゆくりゆくり

ゆくりゆくり

私と葉と法度とゆくりゆくり

源  
うらたはせとせうらんよあここのはて  
かてん思ふおいらん

君の代を何もの時なまははてあま  
はさあつてはかみん

此所心ぬし

はのくあまの毎あて

あれこのくはあまのあて

うあまのあて

都の方へ

うらたはせ

昇

明石乃女はあまのあて

私源のあまのあて

世りともあまのあて

あまのあて

明石乃女はあまのあて

あまのあて

是より宰相あまのあて

あまのあて



諸の字はぬむはとつりといふ  
るげさといはぬまきり

はたのともたつてふらふらふら  
とふひたふらつともあはぬ君はぬ  
とらふらふらふら

子りらふら

ぬ名のともはぬまきり  
乃物あひつらぬよはは  
らふらふらふら

おひりいふらふら  
たふらふらふら

とくまのりかん

京乃西使のよはとつり

西乃り思ふ

明石と乃也事

<sup>明石と</sup>ひらりてふらふら  
つらふらふら

此姫君より神乃せぬまきり

ハカウーけあーと源へドムカカウーの  
しげと源のそと 大定よちかよりの純  
とつかよとく花風もーとありはる  
よふ不及 同 明ふよと性源もーの  
事成あけしてハサぬ人へされまふ  
思ふれ切らぬわらばうとーし  
あやーまてはらよーり  
源の娘君くーとーと  
女君もーとーあーとー

明ふよと子れ出来らまふとやとわよ  
若人ののれりあへ

ゆとあられ

世のあへいさとあられとつあれ

同 ゆとあましていりくーと娘君れ出来

と海事と源れ若人ゆとーとあられ

とーとをうーとあて

ねもあまもとしてぬれ界力あとい

は若人ゆとあまーとあられ



おろそくらあのみて

紫のうほくくらしくいしほさほく

あやしくはねまかやうたり

雲とれ視物あくみあしくあやしく

源れのねひあすしかにけし

うしろくいらあみそ

源のうま

そよぬりあうりしにう

<sup>界</sup>源の初紫れあふんは物えんく源の

あうりしにう

ねそれとつらう源紙えんくま

つらうのね

あうりしにう

は初古表紙三非ナレ

あや

そよぬりあうりしにう

物あくみしはあうりしにう

君あうりしにう

てはうりしにう

くわいし<sup>カシニ</sup>知ると移らりゆのそは流成りて  
あり人方あふぬ事候とくせしとの  
えんし<sup>カシニ</sup>かともりくはあし<sup>カシニ</sup>い<sup>カシニ</sup>くさ<sup>カシニ</sup>  
し<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

はあし<sup>カシニ</sup> 何 流成りてあし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

はあし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

流成りてあし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>  
かあし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

あし<sup>カシニ</sup>く<sup>カシニ</sup>ま<sup>カシニ</sup>た<sup>カシニ</sup>あ<sup>カシニ</sup>し<sup>カシニ</sup>

かゝる事をして、源と書て二人は中  
と書ていふ人——海川の事  
と書ていふとよふ源は明ふよふ海は  
又その外は馬いふ所あるとすといふ  
うらと書ていふ人——ぬつていふ人の  
事あり——

辨方とて書ていふ事とて是と云のか  
いふ事とていふ事とて相好とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい

事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい

私に書ていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい

は次は明ふ事とていふ事とていふ  
事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい  
ふ事とていふ事とていふ事とてい

あり

おれ人さうりまて

昇  
浮初也

明石乃事成の所也

か紙思ふやうの

明石始君り末のものとてそは

事ありん

まうはまきあはは

昇  
卒よこみも紫れあはぬぬあは

くやせ也

ありれおらう〜夕れさあり

む

明石巻之源氏此奇力 此多あひいそら

まうはまきとそ〜はやく煙ハ同〜如

〜ういん

昇

明石巻の場やく煙乃事のひ〜まは終始

せのまは〜らほの〜この孫乃

明石巻よか〜らとあ〜の孫もまわやく

煙乃夕り〜絶てり〜あり

これの浦さかく

<sup>花</sup> 是より紫れはよみいもつら事

紫の源乃出幸つらあはけ思ひ事

すきあそむとよまけ

あそむりこふにても明ふよ人の心ま

あひとと又かり物乃すきひの心り

源乃ゆひあすれ紫れくこり

わきいられとらそしき

紫れ源り打うじはく心ら事

あそむらりしれありさば

<sup>心</sup> 是れ人乃あそりしれ事成る事

てのゆへる初

因あそむるもこみ美人をかりて

れつらりあわんこり

れはあそむるもなこり

<sup>紫</sup> 松本よりあひくこりあはれと秋を烟り

ははれらるれ

源氏君の燈の影のこりあひんと



みまのうけはこりまへはよりて紫れそ  
わらとよりてしんみゆりて

昇

明石の音かきつらうあまよりて烟を  
しんみゆりて源氏根もあまこりてかま  
しんみゆりてしんみゆりて

私くささしり源氏明石よ射して  
しんみゆりてはしんみゆりて煙を  
わらとよまれい煙よさんて  
明石よわらとゆりしんみゆりて

かふこりあれんや

花

源氏君の初も何とれもふ事とわあか  
ゆりの事やと紫よのうけのゆりて  
私源の紫れあまゆりしんみゆりて  
あまゆりて

花

あれより世はゆりてゆりてゆりて  
かふこりて紫よのゆりて

花

源氏の紫よと又わらとあまゆりて  
あまゆりてゆりてゆりてゆりて

翠  
世よりとくあはれし世のいぢまゝに  
つらき世にけりし世のいぢまゝ

私海世乃沉淪と堪忍と  
いぢまゝにけりし世のいぢまゝ

命よりけりし世のいぢまゝ  
とんてなさんとは

人よとくあはれし世のいぢまゝ  
世に君ひりし世のいぢまゝ

人の根をいぢまゝに

いぢまゝにけりし世のいぢまゝ  
源乃のいぢまゝに

いぢまゝにけりし世のいぢまゝ  
あしとのいぢまゝに

私世よりとくあはれし世のいぢまゝ  
かたきとあはれし世のいぢまゝ

いぢまゝにけりし世のいぢまゝ  
是よりとくあはれし世のいぢまゝ

清人よりかき傳へ

志し秘書とてあり

筆をよむにふれ秘書とて傳へ志し秘書  
うみまらやう此のあふくはううまき  
かゝ如神と巻きて置く

五月六日うりうりに

何 イカ  
五十日

光 明石姫君三月十六日誕生五月五日みす

日よあうう人

昇 五十日此秘書 三月十六日うりあうう也

何事といふに叫ひあふと傳へ

昇 都めてあうう此也

杖と君のうまう

男子ハ嫡男ウチ籍此杖ハ此れハ次ハうり也  
あうまう一書事人これハ此の杖也  
后子ト名と如く

うり書事とては事につきてるる事なりと  
いふか如くあうう此杖ハうりとてせの  
うり加とていふ事なり

昇  
源乃と南がく人福の終事との在志  
常此誕生志ありき宿世のやと之記多し  
行末のうのと云々也

松重の義子へくはるはとせと此  
姫君と源此の中は後々付と免とに  
紫上此西腹ありと也出来たりての名浦  
あり生れするらあふとに由是か此之  
くふと物乃西折ありぬ事より

河  
片老カタホ 松片帆心用ル

源はひさし多て

五十日此主人よりふさり

おのり一層ととあつと

西の源はけと多しあつ

此の源はあつとあつと

吉実乃西とあつと

源  
くみ松や時ととたはつと

わとつと

河  
おかつとれとあつと

と、世引くうりぢれ

海松 和名 黒松 一説 何れかの思ふよきもの

海産の松の葉はやう如物之流は危し  
あましし時やととちたれと云

む

五月廿日あれい何れあやあしりり又  
を五十日よあしひしりり也方此ふ  
とついにいつか同ん

昇

海産の松如く一不変の樹初

同

海産此松く不変れけよ若てあまをいつ

ま〜んときあまのつよよふれて視る  
ら〜んときあまのつよよふれて視る

い乃りく〜南をせん

是の源此松女の初如く

入道まいつ〜海へひあまのつよよふれ  
くひはくり

同 貝とらるり 前中とふはくるとあり  
又いつ〜つよよふれと云 む 世れひは  
かいはく〜つよよふれと云

あつたといふに百廿九まで

明石中と五十日共まうきしをりて

こゝに侍ひゆく、御前のことにて

新しりあは使ふは、やれぬの御ん

まふまふと

めれとこゝに女君れ思ふまうりて

<sup>昇</sup>め名上の事く

ねさくをまぬり

あさくともぬと、源氏系りし始し

めれとは俗性か、ものをまぬもあれと

あつたといふに世よあつたといふに

とこれらあつたは、乳母の源氏よりあつ

の御い、さういふに、下り、は事く

いふ御前中、あつた

<sup>解</sup>あつたといふに、あつたといふに、あつた

こゝに、あつたといふに、あつたといふに

あつたといふに

あつたといふに、あつたといふに、あつた

松崎乃君此山ありき故

此れ乃の源氏此山ありき乃のほろふらり  
りしまはるる故

あつらうとあつらふ身といふとあつらふ

梟師タケシ 日本 北勇猛武

乃の事とやうく我身此山ありき  
乃の事とやうく我身此山ありき

あつらふ明石の心あつらふ明石の心

あつらふ明石の心

源乃みづの心と此れあつらふ

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心と此れあつらふ

あつらふ心









源乃しういふくぬりまひあてたし  
はよむらきいあすそのまうじ  
いむらむまうじあくはむぬ  
花散らひはくあてはかやうらむ  
あふらくもくれそふはまう

く井かたにおらうさふらあてはむ  
屋よ月夜し

はむを傳くと源乃むねの月夜  
ころ早下の折は家のありから

とらよはし

源乃はん之禁ハ勿論のあま  
又はのあくははははははは  
さあし又あひあははははは  
まらあも中くく

な<sup>女</sup>あへしゆく水鶴はたふらふ  
かふ月とこ

すうあせらあせらあせら  
はくともあくあ鶴よつとあ

かゝるうつれをの月と入るゝと我か  
ぬんとやとうぬひおゆを

うらめしきとん ねんじゆをいふと

源の男女のたしひおれいあやと初めと  
なすよこよと後よあきうにのゆひ  
うせしおあま里れお性さうおあこくま  
おあていあしと源れそんといんやうてし  
つりてしきりお勝の初也

とあら南ら赤あえ

源乃政系紙納つけまふるあんさ  
あしくそく志ゆ也

そくあめうとたのめさあし始

と皮のまよ源安系れいと南いり  
ちあかつしら時しきしああまこをれ  
源のあよひりちうは升よすしんあ富れ  
月志りしうらんあれあはうとあさ  
めまのしきま

あしとあしひあしと

昇

花教乃ち源の志つと源事と一  
のちいのかうよとくくとうに身ふて射  
面とわくして月をけきせし

おろくにらうけたり

昇

うして始あうく始め神之花教の世  
はとせはう

源は花教よつさくくかうい始は  
とく

かろ五せらとあけられま

或花教里の巻は極本此家りうよ  
一あきくしてさいそ始一五節を  
今も花教里人のれ年うつ事此次は  
そくあや 是後わくの事あり

わやうらけよさいよ

五節君よとすうはえんはと源乃  
事よとくわりてとくよらうんん  
節君れわくはと

かゆう人はとてと

并

五節をわうせんとつて去る人  
けりていふの人せりるもやと  
或此上をいひていふに五節か  
とのむのせんとはていふに  
あとしりていふ

私因去りの明な非君たる  
いそいそいそいそいそいそ

かろ流のはけりていふ

あれ二条院は東院の造師たる

并

二条院よりいふをいふ  
申すもいふあり

うあふすりていふ

を

文はよんていふていふ  
と成あていふていふて  
時をわりのいふていふ

并

いそいそいそいそいそ  
あふすりていふ

見花書

因侍乃切人の書紙

勝の事と源の程をいふれぬあり  
ありき後よむらう人哉

こりす南むりしあうらあせり

川をこりすと南よふとあふふいふ

くあうらわ世うらあふん

女らうまうらうらあせり

勝のこりすと南よふとあふふいふ

朱雀のさ南くあ事勝の南よふと

物のんさうらわ世うらあふん

あせりあふらあふん

中くあせり

因去

朱雀のさ南くあ事勝の南よふと

あせりあふらあふん

あせりあふらあふん

院のさあうら

朱雀のさ南くあ事勝の南よふと

女御更衣のさあうら

御位の時の女御更衣今とらうら

よらやういふやう

東宮北内侍女御

兼兼香殿女御也

かくいささぬりてはるるは

兼香殿女御とては勝よりきかれては

ゆえとたかくありてははるるは御子と

宮りのおはれははるるは御子と

とてはるるは

おれおはるるはあのお前は志をいさありて

つり春文はかりてはるるは

河  
淑景舎 相垂  
昭陽舎 梨垂  
以上東へ

五并

源氏の土庫ハ相垂之一劫奉文ハ別友ハ

おりてはるるは昭陽舎よりありて

いつくおはるとは便直ははるるは

宮とてはるるは

とてはるるは源のりてはるるは

入道とてはるるは

五并

厚ははるるははるるははるるは

女院のりてはるるははるるは

兼院のりてはるるははるるは



と但封戸年官年爵を以て差異をせり  
あつて母を以て封戸の三宮に  
のく千五百戸を太上天皇より  
給ふ所を院司の女院に給ふ事  
判官代主典代に依りて

何  
本朝の太上天皇は持統天皇より  
女帝へ東三條院延元後此例を  
為す女院の号より持統天皇此例  
東三條院正暦二年七月一日院号依りて

續日本紀云 延暦九年閏三月丙子皇后

崩<sup>甲</sup>奉謚曰天之高藤宗照之号虽為  
崩後皇后号准擬之

封戸負數 太上天皇二十戸 三宮各十五戸

東宮千五百戸 一品親王六百戸 二品親王四百五十戸

三品親王三百戸 四品親王二百五十戸 五品親王百五十戸

入道と云ふ石原男女依法の如く入人の名

田融院后石原遵子 二条關白 賴通女 天禄四年五月九日

御出家号入道宮

并

花鳥よあり

わんしとちかりて

は

院司判官代へ 召次仕而 別納<sup>當</sup>而 御膳而

進物而 所<sup>所</sup>武<sup>者</sup>而 御隨方所

さぬしにいけり

五女みけりうとあり一女いけりしとあり

あり院司とちかりて嚴重此神又西と

あひの教を加へ

西とちかりてくは事

藤雲の女院のいはれあり

とあり世りてありて

源氏君と藤雲のむは事今ハ出家入道

し給へいじつて事か又源氏君と

世りてありて出入とありてし給へ

大さうにうさ物ありありと

是の藤雲と源氏中へ大なる光をいん

のちとありてありてし給へいじつて

事と源もいんれし給へあり給へ

口行くそとあく名のふぬく

おの事よあきて

昇

悪名源氏とよひのふも源氏の  
ふりて名よふあつうまうりあて

世人を屋とくは

昇

悪名れくと世人のよひのふも源氏  
まよとるよとく源氏の性みこり

私悪名の原へあくとあひつこく源  
今くくあつうまうりあて

けたりて我よけりあ人まぶくこゆ

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

昇

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

昇

あつうまうりあてあ人まぶくこゆ

心宮より時をきらり候はせ給ふ之紫上の  
少人等と御心もまぬ性く心せまふ如く

入る宮のいしお

藤原の世の文は此の如く候へども  
いふは所多めいごとく是れ也

世中事考りかればとてけて

<sup>河</sup>執政臣二人例 寛平九年七月三日權大  
納言兼左近大将藤原時平権大納言右  
近大将菅家先帝詔云少主未長間一

日万機之政權大納言藤原朝臣菅

原朝臣可奏所請之上事

延喜十五年十二月五日大納言源昇

若原通明已上宣曰可奏并官雜

文書

私源氏の君執政此はより人ごと事志  
けり職より人をもとの如く大政大臣  
出り多しとて大なるの事なりりみそ  
源氏君と世に中はけりこらあり

権中納言乃山比とあ

太政大臣乃身との親中納言二条相宗の  
四君との姉君の十二歳少くありき  
弘徽女よとみより弘徽女の女御に  
おかの殿のちりて

攝政太政大臣はばむとて此孫女に

昔ノ御宮の中君

は中君の紫上のいりうとてむ  
大臣乃山方むとていりうとて三人姉君あ  
るも中君とていりうとて今一人を系  
なりとていりうとて此同腹此いりうとて君  
一人あり

昔ノ御宮

冷白院女御

母曰藤乃山方

紫上

母按家乃山方

毎黒大臣乃山方 大納言大納言の所

し女卷よ入目かをつら

中君ととりてれを紫  
よりのいふことあり

人よりの雨さうりふと

源氏此れはるのいふ

昔ふくまはたけりしはよ源乃そま

いふしはつんとまむ

并

富乃女御此事

松系子此のいふに昔ふくまはたけりし

とむり源乃そまといふしはつんとま

とむり源乃そまといふしはつんとま

るうよは中しあふくといふしはつんとま

あやあむ

その秋はよしは雨さうり

并

源氏八蔵の秋は 御堂此れはるのいふ

同時の事とまむ

因す彼めて此新なるうまのうまの後より  
有りしを秋としかく也

杞りしとかのあつた人

明石よとい節のあつた也

あつたはあつた事ありて

因去年のうまのうま

ね三がめとこうとありてなり

あつたはあつたのうまのうま

不減く也あつたありてなり

<sup>死</sup>明石上りてはあつたなり

五年の懐妊ありてなり

<sup>昇</sup>あつたはあつたのうまのうま

是とあつた也

船めてありて

明石より浦津へありて

乃志りてありてありて

源也あつたはあつたのうまのうま

あつたはあつた也

いさくしきかんまう

敬重乃祚寶也

6 うりきりんたりとありて礼

敬重

或本つりきとあり回心

私に此つ社比のりきとあり

かくあんとくはくあ

は トラツラ

十列

昇月

十列とい東遊の舞人十人馬のあ

装束の喜指とつ物とて社社の  
約幸園白の祭辰春日社をたにり  
くして社惣あて求子あて常てを後  
馬場あててるととて子事ありと此  
つひのあ右近の官人これとほむ八幡  
降時の季中といの殿と乃中客衆人  
より源氏君位者福あて系人をとつ  
とくといつあへ

内大臣殿乃由願とて



源氏君は春後と志すぬんまありよ  
ゆきかきりいふさ海也

けふ何さ海

け下の初は志りされふりともあま  
明ら上のゆ中よあきくより思ふ也  
ゆれかきりあ

ゆれよれんよかくよせくよりみえ  
まひあとも方乃ほよのなるあをさる  
又いあすうにいけいあまぬあか

ふくん成法うしてよせくふりまき  
すんあきんゆのうらにあらあま  
おあかりされあ

松をうれあみよりあはり  
市乃さ海海乃春後の押成り

うのさぬのあはりす  
紫とあけをみよりと位よりて海海

あつゆり

お位乃中あも花人の春色あ

死

六位の薙人麴菴此袍とありとソあり  
ソあり

一劫麴磨と書色と云今と極膳此薙  
人の意也

か乃が薙此のつゝもろくろく右道此也

日

奇院此襦一負はとありとソあり  
いひと〜とのみと極一草也在の  
指依よ如とあり

私いた忠の依とソありあやまれり

死

奇院此襦一負はとありとソあり  
中人後ろよ時此のさつと〜の極  
後ろの位よぬて今又ゆけの耐とて位  
薙人の〜の位ありと〜とせしては所  
物指りは〜の耐とあり

死

一劫六位薙人ありとゆきの耐と〜あり  
〜とありとありと〜とあり

死

〜の耐とありと  
赤衣とあり

死

〜の耐とありと  
日や〜の耐とあり

一勅延尉依赤衣と名と五位女入と三  
幸<sup>レ</sup>け<sup>レ</sup>侍所人<sup>ハ</sup>とと親換<sup>ヨ</sup>り幸<sup>レ</sup>  
た<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>忠<sup>レ</sup>の依<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>り

何<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>し

あ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ら  
け<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>襖<sup>レ</sup>芳<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>深<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup> 因<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>化<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>  
い<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>是<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>

水車と<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>い

明<sup>レ</sup>石<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>し

か<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>振<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>水<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>極<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>  
志<sup>レ</sup>ん<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>侍<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>り

河原丸大臣融賜<sup>レ</sup>童<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>而<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>余<sup>レ</sup>勅<sup>レ</sup>出  
中<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>堂<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>賜<sup>レ</sup>童<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>条<sup>レ</sup>例<sup>レ</sup>也  
今<sup>レ</sup>案<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>堂<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>長<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>給<sup>レ</sup>童<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>也  
長<sup>レ</sup>德<sup>レ</sup>二<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>八<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>御<sup>レ</sup>堂<sup>レ</sup>殿<sup>レ</sup> 一時<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>矣<sup>レ</sup>也 辞<sup>レ</sup>大<sup>レ</sup>將  
同<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>以<sup>レ</sup>童<sup>レ</sup>六<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>十<sup>レ</sup>月<sup>レ</sup>九<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>勅<sup>レ</sup>賜<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>  
近<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>府<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>各<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>近<sup>レ</sup>衛<sup>レ</sup>各<sup>レ</sup>三<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>但<sup>レ</sup>童<sup>レ</sup>子<sup>レ</sup>也  
今<sup>レ</sup>案<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>堂<sup>レ</sup>開<sup>レ</sup>白<sup>レ</sup>隨<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>紫<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>の

いしゆいしゆりりいのみさうれをこの世に來れ  
色目不見あり水丁より入るやわりのまねを侍  
有るや地力と云のちやなるといとおつとさ  
やいつきもあつた女能徳と見ゆれば此童  
殿の六人ともみえりそれの十人とあり

昇

花鳥よみたり或流忠仁云白川は徳和  
河原の大石と号しと云一禪の山流忠仁  
給童隨身中無所見え

又融云童隨身治事國史ありと志す

とこれと也此事流るぬ事とも長七は物  
流より事ふら即ち此流ともか一禪山流

大殿より此より君

夕霧と糸指乃西とも

夕霧此事く殿よりくのみて信をされ

いしゆ

夕霧ハヤク源女一の西より生れり

昇

流るりのせそなう人て  
夕霧よおなうらうの御をなう人て

源北よりい海男かゝり又権よりいふ也又  
例也とありて結構なり也

雲井とらうにめてくくゆりよ

<sup>花</sup>人の行末は世に事とて之 昇白

私共物なすうらやうよとらうに及ひ  
かゝれは海もやうく我とて之

因て明石よしと思ひとててく也

ころ君は較りぬ

私君君也 明石姫君也

<sup>花</sup>明石の姫君は ちこ君とあり 同事と

いふくも解られくはあつてよとあり

明石上の姫君乃事行なり

くめのよみありて

括津さく帯は太臣の系福なりとて

西海うけかといふありとてとて

いふくも解られくはあつてよとあり

明石のりの流は此神よりとて

祓とていさくすも人知る事ありとて



阿うさぬよまむつてまゝふりあり

惟光

白地くわくく云ふ之惟光此方と深中入也

すみしれまのく物うのまれ神代のも

昇

とひけてむりん

先之松よりくり神代のもまの古さる

とまを後明よりまのまの時の事く

或抄の流るれは同

因りありけむの感もるんてあらしては

也

乃かありまゝと見てはまあり

阿うらうらう流のゆひは後しれ神代

かありまむやいふか

はりの浦ありのくぬの流り

ありありかむぬといふては

ありてくくく惟光乃んをふあはれ

源乃初之果後ありかむ作らぬ

因ありありありあり 私 惟光に

ありありありあり 私 初之流り

ス共ナド、流りて一紙れり 私 後

あゝ此船のひくまはなれて

此方乃次権光の初てやうに

非乃山志ろくをさういひかへ

と海の浦は沈みいし時の事りりぬる

おろして明石よなるは初てあまの

いそいそと舟車浦とも皆入るやうに

つくは明神此山志ろくをさう

いそいそと舟車浦とも皆入るやうに

明石よなるは初てあまの

あふん此山志ろく

河原赤い義前は書くは初てあまの

あゝせよいそいそ

一劫をせぬの山後にも此世やと毎月



或  
板七瀬うや七瀬  
八瀬あり九瀬と  
久瀬もあり七瀬  
難波あり七瀬の  
口瀬一あり

近所乃七瀬を市の七瀬といふ事あり  
私洛中よ七瀬あり行かば河へ一難波  
の七瀬尋河へ一

ほり江此よりと西流りて

花

仁徳天皇此御所りありてわづれり川之口

河井と大幸難波時作方

あり江ありと大君此所あり

うんとわづれりて

君

津の玉此ありてゆうとまをれありてみとん

浦の端の如らん

いぬとて行ありてありて

河

まひわづれり今りてありて難波うづり

流りてもありんと思ふ

清きりりやとまひよあひて

旅の果あれははるるの終職事なる

旅店也とほりたる之も惟光の懐中

り用意ししなり

旅店筆硯し由は職事なるに似せし

ほりたるはこも其祈り

此車とてむかふありて

御車多門なるありて筆硯と車の中

へ惟光のたてまつるはあはれはるる

ありあり

とうとうとそりて

源北西のちとんをせは感しありて

身とほりしはあはれなるにあらはるる

あひぬかえよのぬりぬ

因みをはりしはあれとあらはるる

しをほりしはるる

或は鏡み紙はるるは文字法也

ねえあふりか縁わら末七を紙

難波江よ、波てきみは流るゝ水の涼  
さふらふぬのちりしり然よちりて  
逢わ分縁と感してあまのちりて  
てふちりてとて

国史難波江より始立湊漂し流るゝ  
月もあまのちりてとて  
日記あり

新葉十二、水恐衝石とて水尾  
とてかた

又み流るゝ灘湊儘 水急故

とて流るゝとて江海のみはあり  
多てこれとみ流るゝとて  
みて毎年のせらとて

あゝこの心志れか

明石たあゝりり葉内春と津りす  
弱たんとてりり色みあを

源乃下向のさ波く

んかゝりこく

明石乃々

あうけのくねりておたきぬ

明石上源乃乃書信と感

ね

明石上  
教前と三ヶふて難波乃々

津々と三ヶふ〜

〜

つるすよ〜

〜

田子持嶋とみと記は〜

田の菘嶋

明石乃乃西後

西の〜の物と本綿よつ〜

松のい事乃乃西後乃本綿

あて西也事乃乃西後

是ハ源氏君難波乃々

とせぬ〜

〜

物故きてより次りの石より  
乃也事候事候と見て可程なり  
明石の難波にて乃而後七瀬と  
をみへんつゝも乃のうらや海を  
深乃ゆ後七瀬のうらやと見え  
あり

夕一がみらさそ入江乃多門と都司  
まぬほし

かあしゝゝゝゝみらゝゝゝしりや

多みらゝゝ海よそつりや

言渡り新面ゆゝもりは初とみて

通具大細言

夕一がみらさそ入江乃

入江乃多門の都司と都司

霧をさしじゝゝゝあゝあゝゝい衣回裏の徳

の名あはかくれも

ぬゝゝゝゝみらゝゝ海をよゆけ

かふくかくれぬ物あそありあふ

名もいへば既に難波とよ我へより有り  
より此奇よよててん

私難波とて塩みららるる此の奇成  
面白く立ち常の初よるみ此の奇  
みとにほりまらるるまてまらるる  
よ又塩満るる入のるるの奇成  
まぬしつ家をたつる後ありて  
ちあせつるれ

私阿くゆて乃事おるはありて

ふりり阿のきらるるおほき  
あけさ乃じりり似るか  
よみまらるる

みられま

みらるるあま

御ふもいれおりて

明石との

何そひとこれ

越女し 井向

ひんちりめとまきうめまきし

みちちたふはる郷かよの人を是に

目とじりて

されとてやとくま事と

源のふの上達部かとうへは遊女目

とじりてあつ成源氏ん孫て大と世の

人の事成思ひあてんうにいと

ふともとじりたれと

すあーあつ成さたにりめか

花

あつ成さの淡くしきしつん遊女

と書つと侍事と云也

私人乃位はるにりてまきをて

る郷あしゆてものあかへる遊女を

ふとじりてあつてあつて

事あつて人乃をて

昇

あれめちり年とあつてあつて

あつて人て事とあつてあつて

とあつてあつてあつてあつて

きりきり成る様でうらめしき又とて  
よの心成るりてようあそ

<sup>舞</sup>遊女もれ神こ

かろ人のこころさあして

源の西下向のあそ人あそ 明石はあそ

みそくくもてまつり

明石乃を幣こ

とくに津もさゆゆれと

源乃ゆれさうよくて極よきゆと

又中く物さひうりて

源乃ゆありさゆのこころ

也又夕暮のさあゆゆ若よ早うて

物思ひのさあゆゆ 明石とんこ

いまやあそむりしはくさん

不日よ喜作りさゆゆ勝こん早て

あれこゝろのほろ

新入ひるん事ゆ作のさあゆ

さあゆさうさあゆあれ



わ  
~~わ~~  
わ

いまのときとて、  
神紙にうらやま

九~~九~~禅抄此のくし  
祇名云々のくし  
まのやまに  
因ほのくし  
ア一~~ア~~行末乃  
入道

入道

又は  
わかの  
もの  
おの

先と  
ゆ  
冷泉  
らり  
うの

舟

舟宮の代一分より始と  
私舟宮の代一分より始と  
從所の海の出るれはつり始のれ太舟  
流遊子内親王の又十代あり舟流と  
可也るや舟宮と甲一と一  
此らり乃舟又流ととらと  
うらぬと波の事ととらと  
源氏のおと昔ありと何事ととら  
らひとと

じつとつりつりつり

舟  
六舟是舟の事と

私源氏のつりつりつりつりつり  
可のつりつりつりつりつり  
此書は又しつりつりつりつり  
つりつりつりつりつりつり  
あつりつりつりつりつりつり

源氏は名不れ志のつりつりつりつり  
私つりつり又疎遠つりつりつり

遠方へは遠くへも人も是下の中と  
まふれい志のたつひあむしはあむし  
乃位たかともかかへしは思ひありき  
かしのじうのやういあむしはか  
く大いにてあむし

女宮とていつりし移ひまきり

後、冷泉院へありまひて秋ぬ中  
かきくは茶坊の由女は是下の中

程かの六条はあむし

六条院東極は是下の四層へ

なひりあてすみあひきり

媚 周藤 文選 脛腩 遊仙窟川奇歌し

あむしよあむしよあむし

六所是下は遠例へ

はあむしあむしあむし

女宮あてあむしあむし

けくしあむしあむし

女文とてあむしあむし

かかか

源乃西心

さあ〜あつ接ひさふ

んさ波よりあま〜あれた物をこの波ひ

合もろ人あま〜人湯て〜ひ〜

け〜さ〜に〜さ〜り

眼鼻く

六右島の神く

市切りりか

あ〜あ〜のほし

源の初と源のんれ〜のや〜

け〜さ〜ぬ〜

かくも〜と〜さ〜め

それ物〜源乃西心〜

と〜源〜げ〜ふ〜今〜の物〜

あ〜れ〜り〜さ〜

奇宮乃西心

源〜西〜と〜あ〜れ〜婚〜君〜の〜事〜

か〜ひ〜あ〜れ〜り〜さ〜

六右島の神〜の〜あ〜ま〜物〜



是より秋ぬと涼れぬ文こそせしる  
とゆふ人をも何とこひあつられ又悲しきを  
のやうれんと満ちる人こそとせしる  
ふてあふ思ひやり事なれどこのゆふと  
方と津とゆふと

此息れ秋もあて思ひ知りて涼なる  
乃事ぬへて茶の事なれど涼とせし  
まゝ事なり

或は言 方成つて人れとせしる

無つてに意つたや

何いあくとせしるか

あらしさたふと

涼なるは涼れぬ文こそせしる  
かくせしる

やゝこゝろより涼れぬ文こそせしる

是より涼れぬ文こそせしる  
とせしる  
とせしる  
とせしる

うしろの庭は秋の気配あり  
西の空は雲の影あり  
西の空は雲の影あり  
下は空は雲の影あり

秋の気配あり  
けしき物あり

三つひもむらふあり  
きりぎりすあり

又人ちかふ新とちかふ

ひそやかに 潜る

うしろの庭は秋の気配あり

秋の気配あり

西の空は雲の影あり

うしろの庭は秋の気配あり

西の空は雲の影あり

人はかきよせられ

服息よらうの緒し又うらむ  
て人よぬまはれてもうまは  
ちうまのりうらむはまらう

源の初とありうはまらうは  
うまらうらむ

のそらあふらうはあれし

源の丁れ田とのそらぬはぬか  
のちりて痛惱のそらぬはぬか  
又ゆりとのそら

満にあさうはかん

白ツギ

何さうぬはぬ切と

思ひゆり事すうし

秋好のゆりうらうら  
とうまらうらうら

かほはゆいん乃はら

源の初達をわらうはらう  
おれらうらうら

あはれ乃はら



ね

源北所見才阿あうこあまこと大旨腹はま  
きらひ源かふの腹とくしき

昇

源の先才はま

おろしみるもりあうらよ

昇

枯好と相曇北所子のやうあ

松は枯好との相曇乃所子北所のやう

是もことあり

すう おろしき

源北所らーの事と北ま

あつふ人もあまれん

昇

源乃所子もあまことたれん

所とあひ今すう

以後いつく秘んは源乃所是前とよ

らひ治くまで七日八日ありてまら

あへあしむら

源乃所ん

とくは事か

あま事何と源乃り作村あ

又女のりへ人

内記かとりり南のあふ人ともたかた

兼文の宮はりさ

母文斎院に交つとあり

内記ありと

源も人ともいふ

宮は内記ありと

秋好へ源内記ありと

女別當ハコタケあり

兼文かへにあふ女官人

とあふ人のあひ

母内記ありの遠言は事人

内記のりさりとありとありのあひ

ありと

源内記ありとありとありと

とありとありとあり

源北殿の人ともありとありとありと

わくくありとあり

水さしきんかて

源丸精をふておいたす

みとおろしこ然て

ん長のをぬぬ

宮よつ袖

結好を細く源丸をひま

みはしとぬり

源丸娘の壺の壺をぬぬ

かきし

人化ての也事りりり

のゆく菓子地

ゆき

源丸女の初

ありんかひまか

ゆき

あはしけり天翔と

此古更乃つま

こまあんと

けふあつたはしりーちまふてりせむらえ

そこの色のかみれくのりーまに

蔭標色紙へ

くろーりーまのあひまれらあり

りーれり乃西あよ

秋好の事く深成れはくろひつゝいふるこ

こゝあしめく

秋好のびせのほあをくーあくそえまこ

川はくろひはくろいよくろあふれ

これい進人はてあ

あいにああぬくこをこれそよ人ばてか

とれぬ事の聊余く事くあひまの純あは

まみつさかとあさうりて

うすくあくまはくろーああー

と秋好  
こゝあつてにあつたかろーあつたくろーあつた

それととあつたああ

花

わつこたれとこい雲とかくしてよれど  
私情息不よとくれて我身たふかくて  
妹も侍ら梅とよみ花つる

花手もくれていあゝ梅と

母は息不やふいち花のれあてんか  
かといけあう花屋うのれ

くさり花か

花

齊宮たつさうまひ 後の程もあつ  
ましくらよけ花か

かう世は如くやうなれと花  
くさうのほしうさうのわらわつ  
あんとあひくまれきうん

今いんよけとくもいんあつ  
くしとえもあひまいのひまが  
こしこやとあれくさうな

私は版林好のゆき事とく花  
くさうさう花か

と云ふ事言ふてさうり給へばよりゆしく  
そりしむる事く今いふよりけりてとて明く  
と云ふ源氏まゝに如らる人こそやうよえと  
あはひさう人——いふ可くくこととていふ  
源氏性如くは事すもいふれも申り又やう  
よ積まゝ如にいふとちんれいんれあつり  
とねよありて世いの源氏性のかせめてし  
い我まゝあれい世人とてやういふんと思は  
又故所是而色うとて給へ物とて好まれ  
方かくていふ——いふと 冷泉いふせん  
是もいふて後に入田ありて社好申すいふ  
あ——はさうん

源氏とあかきれはかゝぬと

かこ——いふこととていふ——いふいふ

名あはれ島市のおうり如く——源氏お  
やとていふせと

源乃ちあかきうり給て秋好いのみと初と  
人にて如く——

よりかく物くら

秋好の物くら〜ゆふさほくは深かき

女別當内侍

女別當前あり内侍の女もあてまぬへ〜

くちれゆてまらりぬこ〜んごゆり

秋好のほ母〜か〜つ〜さ〜ら〜王孫を死

又ま〜〜はとある候へ〜

花  
秋宮よ志〜〜くあり〜れり王氏乃

女成りて

これ人志まほ〜このゆ〜らひ

琴  
肉〜あ〜せんの手〜

人よな〜りゆ〜ま〜〜り〜り

肉ま〜みと〜せ〜ま〜とゆ〜あ〜ぬ〜

か〜い〜れゆ〜つ〜ま〜

うに〜や〜り〜ゆ〜ら〜成

秋好の西のうらと結木〜ふ〜そ〜せ〜

ゆ〜や〜う〜ゆ〜は〜を〜ら〜ま〜とゆ〜れ〜

うら〜ん〜ゆ〜と〜や〜ん〜ゆ〜ら〜

あまの地へかみうらよまへおわせひもま  
奴色ふやまゝゝあつんとつら

こらゆらとほらあゝあゝあゝ

源乃結好へ好色心とあまのまゝこ入内  
の事ししゝゝはゝあゝゝあゝあゝ

みよさかゝの事すゝ

田島所の伝事

いゝさひゝゝゝゝあゝあゝ

大桑乃あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ あゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝ



秋好乃らほき兒をばし

同—所抄やとさきく—中はと

所島年と秋好の親子此所中はつて  
某宮あとおやとひて

何

同融院所時新文々々つゆきりよ母の所  
宮り海元よとさきく山成勢とそ 母文所  
<sup>抄</sup>はあきいふとあききりすさう山むし  
今よ加しやあきん

け物治相堂の帝依延を准まうたきい

同融院後代の事あれ例ありとさき  
きれり今古れ准擬を記事しはとさ  
きとさきく賢木此巻よのせとさ

私例を記すまへて母の是をい  
てとさきりるよは是所のさきりの  
よとさきれはる事しと秋好の  
—とさきまよんはつた

所—とさきはけつ

あはとさきりるよのせりよとさきをい

とも枯ぬへひりさくふとと海は  
やうり事とくくれふふたふらふら  
あーさくさ

院ふとかろくさうりゆー日

朱雀院のゆー奇ふよふらさうりゆ  
日此御ありさゆ成ふれくくさ  
りす

まつりゆて奇院か

け奇院の朱雀のゆ一版のいりさ

ふりれあしにてしわりーさくゆ  
あしゆさく

<sup>奇</sup>朱雀院のゆ妹さ

ゆんさくゆ

朱雀院のゆさくゆ

かすあくあつゆさくゆ

い枯ぬよ志くさく

あさく

ふのゆ

昇

朱雀院の病氣うらやまがりし  
くさかんと

私由是の如くは秋好よき  
ろとあり又朱雀も病氣うらやまがり  
あつんとあやうくおとせぬ  
いーぬー

今はまてあれふつう  
山島も人おせのこい  
あきれいあうーらひも  
あうまうー

あうう人い思ふ又朱雀  
と病いあうは作る也

おききぬて

朱雀より秋好の事  
源乃ききぬて  
ひ成いこと

人の内ありあはの

秋好乃ききぬて

入道宮

朱萑より枯ぬ此事瓜分るるれは源乃  
らごりて入内させしん事と志おく  
くおほして落宮女院に召せ入内を  
あせんぬめよ中給へ

かろくお事と申ん思ふ給へまつぬ  
是より源氏初之院よりと信る事  
思葉一まつぬは落宮書へ中入る  
はらやま

六条は是雨の事との如くふらうも  
くおのせは源氏あひうての所  
みこととてはわまうれくあは源氏  
と物とあひ給ひ一事

いぬとありてのまいに  
由是所の遺言をうま

はらとては源氏あひうての所  
らとては源氏あひうての所  
とらとては源氏あひうての所  
とらとては源氏あひうての所

とゆふは島なり思いつくは  
とのぬひもさうが思ひさうなれ  
如しや

大うこの世ははきそふにんを

られは公家の男よわらぬ人れうへ  
ふらうーさいんさくふわやうし

かのうみよ4つり

此島所乃男といふ皆源乃引をさふ  
さくこれんとの根とのさうわねれぬ

とーちらんと思ふや

内せとらそねあひ

主上冷の御さくくわすれぬ

此細きかた

はうさめあふんと

為る此いんさくひんやと源乃さふ

いとさうは伊よりさう

為る此はむき命人志う人さ入事  
源乃さうさうわらう

院中もおかしき事あり

朱雀此所より入来りて引か入給ふ  
はしくおかしき事あり西島此所  
遠き入内ありし中もあつたに  
こつてまてまよふ事ありしに  
いふことありし事ありしと  
いふ

朱雀の西寺のいふことありし  
この事ありし事ありし

さうりおし切しはくありし

おかしき事ありし

朱雀の西寺のいふことありし

さうりおし切しはくありし

おかしき事ありし

又源光初之きふおし切しはくありし  
此事成作おし切しはくありし  
事と源光初之きふおし切しはくありし  
志ぬかりありし

とさあううはまよゝ思ふ如く(のこふ事  
かゝる)

<sup>界</sup>源の初也枯女の事同の事とさあはる  
と後さひらふものかゝる事なればん  
もくぬしうま

因歩宮此事と何と云れと云ふ事  
と又人乃好色うにらふかえんがたに今  
先志るぬりゆめて後ま枯女親せん  
とありんとそん

ねあまの院の西前とくかつてのよ  
それよかやうはんうまんとさううら  
いひても世人のいうよとりかえんと  
うはふくあかき人とのれうら  
うらまきん

のちおのきに志すぬをうりおへ

是よりハ又深此の中へ境へハわやう

ても阿らんて

女君も志るらんおよ

<sup>昇</sup>紫上よおへ

<sup>私</sup>

はまへ志るく思ふと深此よりうり

かおへいさあして

いひりても物つきはくひおんて林

好乃事成紫への物へ

入道宮少の兵戸乃宮此姫君

薄雲ハ兄の昔々乃のま乃姫君成入内

うせんといえまに此よりうりあかせん

くうくおほて

ひまあお中

深と昔乃と西よりうりあかせん

事成むまあ海といりり回乃事成り



あり

権中納言乃西じまあひこきてんと

ありあり

おがとれはこめて

弄

権中納言乃女とむりり大はれ西子り

ありあり

人より北西阿きいしき

主上 冷十一女弘徽殿十二女之西あきひの

しきく

宮の中君とおありはしに

吾よりまの中あひ弘徽殿と甲一様と

まさられいありはきひのいっかあきひ

乃らりす人まらいつり 乃らるの西

あり

おがとれはこめて

輝ねれ事く

乃らりす人まらいつり

入内之事は乃らるの作らる

おとろふちのよわやういふ事なく

これと病を言ふ所は主上乃西の大さ  
乃政の御病の介に依りおのれは  
ふのさうとあつれよぬのりさ物  
是と云ひは秋好なる此事と冷の事  
と思ひ入る事源乃西の事と

宮のいとあはれく

入るの事此事

私病言ふ所は主上乃西の事と

因へ来りぬ事いと久くはわ

うさひぬ事

すうにむひてういひぬ事

病の

みし此十又秋好中宮の事あり

ま

病を言ふ所は主上乃西の大さ  
ちと病を言ふ事と病を言ふ事と  
る事入事と病を言ふ事と

すとるうふさの御しるふ

昇奥よはと御分

為雲天上天皇事 中宮と辞し給て  
此の後ハ中文にてハありし由と云ふ事  
後中々中宮とヤリ多クハ陽明門院誕  
生長和二年七月皇女ハ歌御太刀事  
業苑才一由りし法一とてりて月ハ  
まり  
私河ニアリ

